
ハンター×ハンター（実験作）

仮名ライター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハンター×ハンター（実験作）

【Nコード】

N2611Z

【作者名】

仮名ライター

【あらすじ】

H×Hのオリ主転生テンプレ物、原作のあの人の兄弟に転生してみつともない感じで生きてるオリ主が少し頑張る話です、あまり考えずに書いてるので実験作としました

始まり

なんだろうね？ 正直驚きすぎて笑える何が起きたのか分かり易く言う説明すると俺は死んだっばい

しかも学校の帰宅中で電車待ちしてたら背後から押されたのは覚えてる

で、気がついたら目の前に胡散臭いおっさんが立ってるんだわ
まじビクーリ

しかもおっさんが最初に言った言葉は「お前はもう駄目だ！」だとさ
もうびっくり、それで色々説明してくる訳よ

自分は『悪魔』だとか言ってるの、どうみてもただのおっさん

ハゲ頭、眼鏡でくたびれたスーツ姿、あれだよ完全に世間に疲れたおっさんだよ

きつと家でも嫁とか娘に除け者にされてる感じ

混乱してたけど思わず言っちゃったよ、『悪魔ならもっと悪魔らしくしろ』って

そうしたら、眼鏡外して一重だった目を二重にして、キリッとした表情でいう訳よ

『我が輩は悪魔だフハハハッ』ってさ、どこの閣下だよ

まあそれは置いといて、おっさんが言うには、俺の背を押したのは天使で、それもイタズラらしい

なんだよそれ、天使怖すぎワロタって笑えないし

そんな適当な返事してたらオッサンが『気に入った』とか気持ちワルい笑顔作って言ってるんだよ

『ちよつと待ってる』って言った後に目の前から、消えた

手品とかそんなレベルじゃない、マジで消えた文字通り消失した
ただ残された眼鏡がハンパないくらい哀愁漂ってる

その後普通にドアから入ってくる訳よ、っていつかドアあったのかよ

『ここ何処だ?』って尋ねたらオッサン俺の事無視

『まあまあ取り敢えずこれ引いてみ?』って抽選箱って言うのかな
?なんか上の部分に穴が空いている箱を俺の前に突き出してくる

怪しさ爆発『なにこれ?』って言っても

『いいから、いいからオッサン信じて〜』、クツ、ウゼエ……

つか自分でオッサンって言っちゃってるよ

オッサンの足元にはまだその箱がもう一つあるんだが、そこにはこ
う書いてる

【ジャンル】って書いてるんだがマジ意味不明、ちなみにオッサン
が今持つてる箱には【作品】って書いてる

『いいから引けよ』ってオッサンにしつこく言われたから

もう相手するの面倒になって、諦めて手を突っ込んで一枚の紙を引
いたら

『H×Hの世界』って書かれてるんだが、聞き覚えがあるがまだ頭
が混乱してるのかなかなか思いたせない

『次はコレ』って足元にあった【ジャンル】って書かれた箱を出し
て来る

引いたら『ガチシリアル(笑)』って書かれてた、なにこれ?

『イヤー、いいの引いたね! 君いいよーすごいよー』って
言いながら近付いてくる、めちゃくちゃ顔が近いぞ

頼むからもうちょっとと説明してくれとか聞いても全部無視

『で同意する?』えっ? 何が同意するだ、もう少し説明してくれ
てもいいだろう……

『で同意するの?』、このオッサン俺と会話する気ないだろ

もうどうでもいいや、同意してやるどうせ死んだんだからこれ以上
の不幸はないだろう

『で、同意してくれる?』

『同意します』

『よしきた！ ならコレにちょこつとサインしてくれる』
ハイハイ、俺はオッサンが何処から出したかわからないが一枚の用紙を手に取り、渡されたペンで名前を書き込んだ
色々よく分からん文字で書かれてたが、もう気にしない
『契約完了』って言った時のオッサンのニコニコ顔まじキモイ
でこれからどうするんだ？

えっ？ 何じゃこりゃー！

空気が震える、比喩的な表現ではない全てがブレ、じよじよに青年と目の前にいる者以外の物が崩壊していく

「おめでとう！ 君は救われた！ 今のつまらない器を捨て、新たな器で新たな人生を謳歌するといい！ なぁに心配する事はないさ！ 君に天国や地獄は似合わない、そう待ってるのは新天地！ 喜び狂気し狂え！」

悪魔は叫ぶ、その目に宿るのは狂気、口から漏れる言葉からはどす黒い歓喜

「笑え！ 痛みすら喜べ！」

悪魔は青年の頭を片腕で鷲掴みにし、凄まじい力で持ち上げる
万力に絞められたような圧力が青年の頭蓋骨を圧迫する
ギシギシと骨が軋み、今にも砕けそうになる

あまりの出来事に青年は抵抗するが、凄まじい力の悪魔には通用しなかった

「あつははははは！！ それではさようならだ青年！」

悪魔は青年の頭によりいつそ力を加える、青年は足掻き悶える

「！！やつ、止めてく『グシヤ』」

助けを求めた青年の言葉は途中で止められた

単純だ頭を悪魔によって握り潰されたのだ

悪魔の手からは大量の血液と脳みそだった何か、ポタポタと垂れる液体を悪魔はピチャリピチャリと舌で舐めとる

「……しまった、キチーーンと対価の説明をするのを忘れていたが、まあ大丈夫だろうククッ……」

手についた物を全て舐めとると悪魔は笑う

そこには何も残らない青年の死体も初めからなかったように跡形もなく消え去った、ただ悪魔の笑い声だけが木霊する

1話

少年は森の中を必死に逃げる逃げる逃げる、走る走る走る
決して後ろ何て振り向かない、振り向いてしまえば奴「奴」に捕ま
つてしまう

余裕何て物はない、ひたすら駆ける目的地何でないただ己を追う者
から少しでも離れなければならない

「……ハアハア」

どれくらい走つたのだろう、少しずつ自分のスタミナがキレてくる
もうダメだ捕まる、追って来る者は獣のような動きで自分を捕らえ
ようとするもはや抗う術はない

頬に汗が伝う

分かっていたアイツから逃げる事が不可能って事は、だが逃げな
ければならない

そう捕まってしまうえば俺は俺は……

少年は全てを諦め目を瞑り足を止めた

「やっと追い付いた！」

追跡者はまるで猿のように木から木に飛び移り少年の前に着地する

「クッ……」

クソッ、もうダメだ

「何で！ 逃げるの！」

少し怒り気味に声を荒げ問い掛ける

「うるせえ！俺は嫌だって言ってるだろ！」

「約束破るの？」

先程以上に怒気を言葉に乗せ、睨むまさに静かな怒り

「グ又又ッ……」

「グ又又じゃない、もう出発の時間になるんだから準備してよ！」

「わ、わかった、わかったからそんなに怒るなって！」

ドンドン近付いてくる少年に両手を突き出し静止を促す

「はい、これ荷物」

少年の1人がもう一方の少年にリュックサックを投げ渡す

ずっしりとした重みを感じ若干苦々しい顔をしながら受け取る

「それじゃあ、行くよ！」

「ハイハイ、分かってるから叫ぶなって」

「【兄さん】だろ！」

「アホ、俺が兄だお前のような脳筋が兄でたまるか」

ギヤアギヤアと言い合いながらもどこか楽しげに少年2人は青く美しい空の下歩く

物語が始まる本来有り得ない者を交え紡がれる

開幕

今うつすらながら覚えてる俺の前世は本当に呆気ない終わりだったと思う

悪魔らしき者に頭をアイアンクローされてあまりの痛みで気絶したつてのが最後だ

あの時の「痛み」前世の出来事の中で唯一鮮明に覚えてる、ふと頭によぎるだけでゲロ吐きそうな気分になる、これぞトラウマ何だろうで、急転直下な展開だが気付いたらまさかの赤ちゃんを飛び越して3歳ぐらいになつてた

今に思えばありがたい話した、体も至る所の筋肉が未発達のため動くことすら出来ない、喉の発生気管も未熟なため言葉も喋れないまともな人間なら精神構造に支障が出るレベルだ

一時期はそりゃあこの環境に戸惑ってたが、流石に慣れた

だが一度慣れてしまえばあつという間だった、少しずつ成長するに連れて前世の記憶が薄れ

新たな知識、生まれ変わった世界の文字、ある程度の常識が否応無しに脳みそに叩き込まれる

最初に思ったのがこの世界が異常だと言うこと、そして思い出すのもイヤになる「痛み」と悪魔とのやり取りで見た【H×Hの世界】H×Hつてのは何となく覚えてる、確か漫画か何かの題名だった気がするのだ

だから何だつて話したが、俺はこの世界がそのH×Hの世界なのは？と疑っている

もう確かめようがないので、どうしようもないが若干気になるが、

どうしようもないからこれに付いても考えるのは止めた
まあ異世界何だ、と無理やり納得し今生活している

ああ、ちなみに生まれ変わって兄弟ができた

ゴンって犬みたいな名前だが紛れもなく血のつけた兄弟だ
よくどちらが兄か弟で喧嘩する

それと俺はダン

ダン・フリークスだよろしく

2話

俺ことダン・フリークスは今日これから愛しの故郷であるクジラ島からサヨナラしないといけない

理由はちよつと長くなるが、少し身の上話になるけど聞いてくれ俺とゴンに父親や母親はいない別にその事に付いては俺もゴンもさほど気にしてはいない

代わりに母と言ってもいい存在、若く美人だが怒ると怖いミトさんが島の人達と協力して育ててくれた、この人達に俺もゴンも凄く感謝してる

いずれこの島で漁師とかして嫁さん見つけて第二の人生をゆっくりまったり謳歌しようとも思っていた

だがある日そんな儂い夢をぶち壊す、出会いという名の糞みたいな運命が俺とゴン、いや主に俺の将来設計をうち砕いた

それはカイト、長身でロン毛の帽子被ったお兄さんの出会いが発端だゴンと俺が暇つぶしに野山を駆け巡って遊んでいたら、うっかりキツネグマ子ずれ（後に聞いた）のテリトリー入って襲われたのだ俺は何とかゴンにバレないようにゴンを盾に逃げ回った

別にゴンが嫌いって訳じゃないが、俺は痛いのは死ぬ程嫌なのだ俺とゴンはもうヤバイ、これは殺られると思った場面でそのカイトに救われた

さっそうと現れドスでキツネグマを半分にしやがった、イヤイヤありえねーよどんな筋肉してんだよ熊を真っ二つとかねーよ

と突っ込みたかったがそんなアホな事思ってたらカイトが近付いて来て「立てるか？」の一言で、恐怖でブルブルと震える足で立ち上がると

いきなりカイトにゴンと俺はパンチをかまされた、衝撃で吹き飛ばされ痛みで悶絶しそうになったが

カイトによる「馬鹿野郎！」と凄まじい怒鳴り声で正気を取り戻し、ジクジクと痛む箇所を押さながら俺とゴンは転がったまま、カイトの説教を聞いた

カイトはこの時期こんな場所でウロウロしてんじゃねーそんな事も教えてくれなかったのか？の言葉にゴンが

「親父はいない生まれですぐ死んだオフクロもない」と告げるとカイトは申し訳ないと思ったのか、帽子をつまみ顔をゴンと俺に背け、化膿止めの薬を怪我をしたゴンに投げ渡した

そしてキツネグマの子供に視線を向けるとゆっくりと子キツネグマに近付いて行く

小さいながらも必死で威嚇する子キツネグマ

何となく理解したカイトがしようとしてる事に、まあ可哀想だけど俺はしょうがないか、と思いながらカイトと子キツネグマを見ていると

ゴンも薄々カイトが今からやる事に気付き、立ち上がりカイトのそばまで行く

ゴンが子キツネグマをどうするの？と聞くとカイトは殺すどちらにせよ長く生きられない生き延びても人間に復讐する可能性があるから今殺す、の発言に

ゴンは慌てて子キツネグマの傍によると膝を曲げ子キツネグマを抱き上げる

ゴンの胸の中でギャアギャアと騒ぎ爪を立て引っ掻くがゴンは痛がる素振りも見せない

俺はそんなゴンを見ていつもの病気が始まるなーと思った、ゴンは頑固だからなもう何を言っても聞かない

自称兄である俺ですらもう止めれん

「俺が育てる！」

あーやっぱりな

カイトがゴンに人に懐かないから無理だからって言ってるが、それこそ無理だ。ゴンはもうこうなったゴンに何を言っても無駄無駄。カイトがジツとゴンを見つめている、変な空気が漂う中、カイトは何か気付いた俺とゴンを見やった

「まさか……もしかして……お前らの、お前らの親父の名はジンっていうんじゃないか!？」

いきなり親父の名前出したが、知り合いなのか？俺もビックリだ。まさか親父の名前が出て来る何て凄くドラマチックだ。ゴンがジンの名前に、ビクツと反応して立ち上がり、腕の力が抜けたのかその隙に子キツネグマがゴンから離れる

そこから怒涛と展開だ

カイトから自分は現役ハンターをやっていると聞き、ジン俺達の親父はカイトの師匠である事

カイトはジンに認められたためにジンを探してるらしい最終試験だとか何だそれ、かなりウザい奴だな親父って……俺ならさっさとジンの事忘れて探してる時間を別な事に使うぞ

仁義とか恩とかわからんでもないが、そこまで親父に認められたいのかねー全く持ってわからん

やたらゴンがカイトの話しに食いつく、今まで死んだと聞かされてたからしょうがないでもないけど

ミトさんから死んだと聞かされたが、とつくの昔に嘘なのは気付いてた、ミトさんは根が真面目で嘘が下手だからね

別に死んでようがどうなってようが親父の事に興味はないから凄くどうでもいい

親代わりのミトさんがそう言うなら騙された事にしようと思っただから、さらに真面目で純粋なゴンはその嘘を信じた、色々面倒くさいから俺はゴンには何も言わず放置した

それが裏目に出たかもしれないと今のゴンを見て軽く後悔

カイトからジンに付いて聞いているゴンの目がヤバい、目がキラキラ輝いてる

伊達にゴンの兄（自称）はやってない単純なゴンは憧れ始めているのがわかる

【ハンター】 【ジン】に

これはひじょーにマズい

カイトの話しを聞いている合間にキラキラゴンを横目で見てイヤな汗が背中をつたう

結構な時間カイトの話しを聞いていた区切りのいい所でカイトはもう終わりと言いたげに立ち上がり

ゴンに近付いてくる子キツネグマを見て最後にこう言い残した

「いいハンターってやつは動物に好かれちゃうんだ」

子キツネグマがゴンに飛び付く、あっさり懐くのを見てゴンに若干羨ましい視線を送る

さっきまであんなに警戒してたのに、不思議だ
ちよっと触ってみようと手を伸ばしたら

「イテッ！」

軽く威嚇され引っ搔かれました、血が出て痛いです

その光景を見たカイトが

「お前は無理かも」と言い含み笑いして去って行った
ちくしょう、別にハンターになるつもり何かないしいいけどね！

ゴンが子キツネグマを抱きかかえ俺を見た

「ねえダン」

「ん？ どうした」

嫌な予感がする

「俺ハンターになろうと思う、ううん、ハンターになる！」

「えっ」

「ハンターになって、親父を見つけよう！」

ヤバイヤバイ

「だからさ！ ダンもハンターになって一緒に親父の事探そう！」

「な、何で俺も……」

「だって兄弟だから！ 一緒に頑張ろうよ！」

「えー……」

「嫌なの！」

やはり巻き込む気だ、やるよね？ 当然だよね！ みたいな言い方に俺はもうたじたじだ

これは返答次第では俺の人生は、ゴンと一緒に親父探しの地獄ツアー
ーご一行に参加させられてしまう

「い、いや、ちょっと待てゴン、落ち着け」

「嫌なの！」

これは無理だ今の興奮しているゴンに俺の意見何て通らない
ど、どうしたものかとりあえず、嫌だつて事をキチンと言わねば

「ダン！ ハンターになろうよ！」

「フウツウ！」

この子キツネグマめ、なぜ今俺を威嚇する！

「ダン！」

「フウツツ！」

何という迫力、俺の口よ！ 止めてくれ！

「ハンター！ 実は生まれる前からハンターになりたかったんだ！

親父も一緒に探してやろうじゃん！」

この瞬間、俺の人生のレールが決定した
ゴンと言う名の列車に俺は連結したのだ

旅立ち

「ミトさああああん！」

船の上で俺は泣きそうになりだから、涙目のミトさんに手を振る
行きたくないよーミトさん助けてー！と叫びたい

「元気でねー！！ 絶対ダンと一緒に立派なハンターになって戻っ
てくるからー！！！」

クツ、もう戻れないのか！ いや海に飛び込むか？

「何で海見てるの、何してるの？」

「ミトさああああん！！」

出発

3話

船に揺られ気ままではない、船旅

さつきまで嵐にぶち当たり、船の中は地獄とかしたのだ

船酔いだ、数人の柄の悪い馬鹿共は船旅の嵐を舐めていた

ゲロを吐きのた打ちまわるアホ共を見て、俺も気分が悪くなりそうになるが

俺とゴンはダテにクジラ島で育ってない、海で遊び、たまに漁師の手伝いしていたからこんな屁でもない

ハンターになるとゴンと約束してからの3年間色々訓練したのもいいだろう、俺なりに体を作る筋トレ体力づくりもした

ゴンは元々俺以上に野山を駆け回ったおかげなのか、いまだにゴンには力も体力も勝てない

まあ荒事はゴンに任せればいいんだし、もしハンター試験の落ちても

「あーあーこんなに鍛えたのに、ハンター試験落ちた、あー悔しい、

ゴンすまん、親父はお前一人で親父を探してくれ、ハンター試験落ちた俺に尊敬する親父殿を探す資格はない（キリッ）」

って言えば逃げれるかもしれない

そんな事を考えてたらゴンが近付いて来た

何！俺の考えがバレたのか？と一瞬焦ったが別の用件らしい

「ダンも手伝って」

「何をだよ」

「さつきの嵐で船員さんの人手が足りないみたいだから、洗濯物とか手伝わないと」

「アホウ、何でそんな事せねばならん、そもそも何でお前がそんな事してんだよ」

「でもせつかく乗せて貰ってるんだから、これくらいやらないと」

「はいはい、なら頑張ってくれ、俺は寝る」

「やるよ、ね？」

「やります、実はやりたいと思ってました」

「なら、ハイこれ、その紐に干しといて」

ゴンは俺に洗濯物を手渡すと、近くにあった水の貯まった蕾から水をコップに入れると船酔いに効く草？を手に持ってぶっ倒れた人に甲斐甲斐しく運んで行く

何でゴンは俺にだけ強気何だよ、兄気取りか？俺が兄だって言うてんのに？

今更言うが俺とゴンは双子だ、ジンが俺とゴンがベイバーだった頃にクジラ島に連れられて来たが

どちらが先に生まれたのかジンは忘れたせいで、どちらか兄か弟かわかってない、そのせいでよくゴンとどちらが兄かで喧嘩する

今でも決着が付かないから保留になってるがお互い兄と主張するかから周りはいい加減にしろ、と言う目で見てくる、でもこれだけは譲れないのだ兄として

「ゴン、こっちは終わったぞ、ようがないなら俺は寝るぞ」

「こっちも終わったからもうする事は何も無いよ、でも上に海の様子見てくるけど一緒に行く？」

「遠慮する、さっきの嵐でボコボコにされた人達の悲鳴のせいでちやんと眠れなかったから今寝るわ」

「うん、わかったちよっと思って行く」

相変わらず元気な奴だ、ザ・子供だな、常に冷静沈着な俺を見習えよまったくよし寝よう

『これから、さっきの倍近い嵐の中を航行する、命が惜しい奴は今すぐ救命ボートで近くで島まで、引き返すこつた』

うるさいな、船内放送か？前の嵐よりヤバいから逃げたい奴は逃げろつてか？

なにいいいいとか、もういやだあああとか言ってる奴らは下りるな、俺には関係ねえ、あの程度の嵐の倍如きではうんともすんともこない

貧弱な奴らだな、貧弱貧弱

いや！ 待て！ チャンスだ逃げ出すチャンスだああ！

さつとハンモックから飛び降り、脱落組の後にコッソリついて行くゴンに見つからないようにひっそりと

小型のボートが海に下るされ、脱落組がドンドン乗り込んで行く1人2人、後2人前の奴が乗ったら俺の番だ、心音が高まる、これがラストチャンスかもしれないミスは許されない、慎重に慎重に気配を消して

「どこ行くの？」

「えっ？ 何が？」

「今ボートに乗る列に並んでなかった？」

「ちげーよ、最後にこの人達に挨拶しようと思って傍に居たんだけ、少しの間でも一緒に旅した仲間だし」

儂い夢だった

「それならいいけど、それと船長さんが呼んでたからダンも早く来てよ」

「……了解」

救命ボートが俺を救命せずに去って行く

「結局客で残ったのはこの3人か名を聞こう」

マッテー、オレモ、ソノキュウメイボートニノセテ！

「……いや4人か」

オイテイカナイデー、オレハココニイルゾ！

「ごめんなさい連れて来ます」

「何だありゃ」

「ふうー……」

「あの2人が戻って来たら名前を頼む」

クソが、ゴンめ兄にたいしてヘッドロックとは何と無礼な弟だ
船内に戻され船長とひよる長い男と変な民族衣装着た男？女？が待
っていた

どうも俺待ちだったらしい

「……………という者だ」

自己紹介って……競争相手に自己紹介って……

しまった、今このサングラスの人のちゃんと聞いてなかったな

何だっけペロペロ？テヘペロ？レロレロ？みたいなニュアンスだっ
た気がする

若干ボーっとしてたらゴンに肘でつつかれた

「俺はゴン！」

「自分はダンです」

「私の名はクラピカ」

後でサングラスの人の名前ゴンに聞いたところ

船長が壁に手でもたれながら

「お前らなぜハンターになりたいんだ？」

突然の面接官みたいな質問が気に入らないのか、ペロリロ？は露骨に嫌な顔をして船長に突っかかる

「オレは親父が魅せられた仕事がどんなものかやってみたくなくなった」

流石ゴン、マイペースだそれに素直だ

その後ぶっ飛ばすが、この船長は実はハンター試験の試験官らしい、答えられないなら降りろって発言で

渋々クラピカとレオリオ（クラピカがレオリオの名前を言ったので覚えました）がハンターになりたい理由を話した

まず最初に俺、ゴンと似たような事を言ったら訝しげに船長に睨まれたが、おれはそれをスルー

クラピカはどうも復讐らしいあつさりと言ったが、かなりシリアスな話した幻影旅団か……危ない奴らも居るもんだ
レオリオは金目的らしい、かなり共感できる人だ

その後よせばいいのにクラピカが「品性は金で買えないよレオリオ」挑発してるのか、からかっているのか、わからん一言でレオリオがキレた

売り言葉に買い言葉か、クラピカはもつと冷静な人かと思ったが意

外とキレやすいな
まあいいんじゃないミトさんも言ってたが

「その人を知りたければ、その人が何に対して怒りを感じるかを知れ」

「おおー、ゴン覚えてたのか」

「うん、ミトおばさんが教えてくれた、オレの好きな言葉だからね」

「おいコラ、何度も言ってるがミトおばさんって言うな、せめてミトおねーさんだ」

おばさん言っんじゃないねー、ミトさんはまだピチピチだ

「う、ごめん……」

「ツツケタマエ」

「オレには2人が怒ってる理由はとても大切な事だと思えるんだ、止めない方がいいと思うよ」

「同意見だねー」

「う……む」

船長も納得したのか2人を止めるのはやめた

これで一息つけると思ったが、世の中やっぱりそんなに甘くないらしい

船員が慌ててやってくると、想定以上の嵐のせいで風がヤバいらしく大変だった事だ

船長が急いで甲板にあがるとみんなてんでこ舞い状態

そんな中でもクラピカとレオリオはまだ言い合っている

「船長オレも何か手伝うよ！」

ゴンが何か手伝う事がないか船長に聞いたら、1人の船員が

「よし！ 来い！」

「うん！ すぐ行く！」

「ゴン頑張ってくれ！」

「ダン！」

「お、お、俺に、俺に任せとけ！」

何でもやってやんよ！

その時あまりの強風でマストの一部の木が折れ、悲惨な運命な星の下に生まれたのか1人の船員の顔面に直撃する、悲惨な運命は続くらしい、波に煽られ船が傾く
このままでは船員は海にドボンだ、この荒れ狂った波に吞まれれば100%死ぬ

「カツツオ！！」船員が叫ぶ

「チイツ！！！」

レオリオが舌打ちをしながらもカツツオを助けに走る
クラピカもワントンポ遅れながら駆け出す

「バカツ、ゴン！！！」

ゴンも駆け寄って行く

「クソツ！！！」

俺もダッシュ、ゴンのやろつとしてる事を一瞬で判断し、思わず追う
レオリオとクラピカが足に手を伸ばすが僅かに届かない

「くっ！」
「ちィ！」

もう終わりか船員＋レオリオとクラピカの顔が真っ青になる

ところが命知らずの馬鹿2名、いや1人は多分思わず飛んだのだろう
ゴンがカツツオの両足を掴む、さらにダンがゴンの両足を掴む数珠
繋ぎ、さらにさらにレオリオとクラピカがダンの足を掴む、数珠繋
ぎ！

慌てて船員達が集まりみんなを引っ張る

「よくやった坊主共！」
「坊主、礼を言うぞ！」

身内が助かったのが嬉しいため、大声を出して俺とゴンに礼を言う、
ちなみにカツツオは運ばれて行った

「あいてー鼻うつちった」
「ゴン勝手に飛び出すんじゃねー！俺も鼻打っただろ、めっちゃ
痛い涙出たぞ」

レオリオとクラピカが焦った様子で迫ってきた、なんだ怪我人に暴
行か！

「何という無謀な！！下は激速の潮のうずで、人魚でさえ溺れる
といわれる、危険海流だというのに！！」

「おれ達が足を掴まなかつたら、おめえらまで海のモクスだぞこの
ボケー！！」

（か、顔が近い！）
（そんなトコで決闘してたくせに）

「でも掴んでくれたじゃん、ダンもね」

能天気な言いよういその場にいたダン以外の人間がキョトンとした表情になる

「うるせえ、ついだよついで、馬鹿な弟が考えなしに突っ込むから、兄である俺がしょうがなくフォローしたんだろが、謝れ俺の鼻に謝れ！赤くなっただぞ」

「よく言うよ、ダンも考えなしで突っ込んできたくせに、それにオレが兄だって何度も言ってるだろ」

さらにダンとゴンの漫才のようなやり取りを見た、レオリオとクラピカはお互いのわだかまりが馬鹿らしくなったのか
気恥ずかしそう顔を見やってにお互い言いすぎた事を詫びた

「くっくっくっはははは！ お前ら気に言っただぜ！」

いきなりテンション高いな

「今日の俺様は凄く気分がいい！！ お前ら4人は俺様が責任をもつて、審査会場最寄りの港まで連れて行ってやらあ！！」

「あれでも試験は？」

「おいゴン、余計な事言うんじゃない」

「でも……」

これ以上もう何かするのは嫌だぞ、休みたいんだ

「うれしくて忘れちゃったよ、それより舵取りの続き教えてやる！

「！」

「うん！」

よしよし、ゴンが船長に舵取りとやらを習ってるうちに俺は寝よう

「おい！ 何してんだお前もだ！」

船長が俺を指差した

「ダン！ 何してるの早く！」

「ちよつと俺眠いんだけど……それに鼻も痛いし」

「えっ？」

「あー習いたかったんだ舵取り！ いいタイミング！」

「早く来い！」

「ハーイ！」

ゴン頼むから引きずるのは止めてちゃんと行くから

視界の中でレオリオとクラピカが俺とゴンを見て笑っているのを見てちよつとイラつとした

題名なし

ダンが変わってる

ずっと一緒に居てるけど、その印象は変わらない

クジラ島の皆はオレとダンは双子なのに性格が真逆だなって笑いな
がらよく言う

自分にはよくわからないけどダンがそれを聞いて

「あたり前だろ、お前みたいな脳筋ゴリラと一緒にすんじゃねえ」

ってオレを馬鹿にする、そうなら喧嘩になるかダンが一方的に
喋ってどこかに行くんだよね

でもよく口喧嘩しても何しても、オレはダンの事が好き何だ、だっ
て血の繋がった兄弟だし、天の邪鬼なところも含めて

ダンと初めて本気で喧嘩した時、少しダンの事がわかった時の事を
オレはよく覚えてる

ミトさんから親父もオフクロも死んでると、今より小さい頃に聞か
されて、それがよくわからなかった、オレには親父やオフクロがい
ないんだって事はわかった

悲しい気持ちになってオレは泣いた、森の中で一人で暗くなるまで
泣いたんだ

「何泣いてんだボケ、帰るぞ」

「……うるさい」

「うるさいじゃないよ、余計な手間かけさせやがって」

「何だよ……、ダンは悲しくないの？ オレ達に親がいなくて死んだって聞いて！」

「アホウ、いいから帰るぞ、ミトさんが心配してるし、近所の皆もお前の事探してんだぞ」

「……ッ！、そうだよね！ いつもいつも！ ダンはオレの事を馬鹿にして！ オレの事嫌いならほっといてよ！」

「ぐちゃぐちゃうるさいんだよ、このマヌケ！ 脳筋のお前はオレの言う事に黙って従っとけばいいんだよ！ このモンキーが！」

「ふざけないでよ！」

「イツテツ、押すなよじゃないよ！ 何だ暴力か？ ふざけるんじゃないよ！ そのガキの典型的ないじけて皆を心配させるバカな考え、俺が修正してやんよ！」

あの頃は殴り合いの喧嘩何てした事なかったから、お互い無我夢中で殴り合った

「イテッー！ 痛い、超痛い！」

「ハアハア……」

ダンが頬を押さえ転げ回ってるのを見て、オレは冷静になってダンを見ると

服が至る所擦り切れたり、手足にも細かいすり傷が出来ていた
喧嘩する前の姿を思いだす、多分服や細かいすり傷は始めからあった靴も泥だらけ、でも何で？

それにここはダンと何時も遊んだりする山よりもっと深い、オレ一人しか来た事ない場所なのに、何でダンがここに居るんだろう？

「痛いー！」

「ねえ、ダン……、ダンはオレの事探しに来てくれたの？」

「はあ？」

「ダンはおれの事心配してくれたの？」

「ふん、誰がするか、つか帰るぞ、早く帰って治療せねば、俺のつるつる卵のような、まるで生まれたてのベイビーのようにきめ細かいお肌に傷が残ってしまう」

「フフツ」

「何がおかしい！ 謝れ！ 俺に謝れ！」

「うん、心配かけてごめん」

「ちげーよ、そこじゃねーし、俺を殴った事を謝れ！」

「何で？ 殴ったのはそつちもだろ！」

結局また殴り合いになった、でもさつきとは違う気がする

「痛い！ 口から血が！」

「帰ろう、ミトさんも待つてるし、ちゃんと謝らないと」

「ちっ、謝る時にダン兄様のおかげで反省しました、ボロボロになった服も全部この馬鹿な自分が悪いんです、だからダン兄様の事は怒らないで下さい、ってちゃんと見えよ」

「なんだよそれ」

「もういいとにかく帰るぞ、腹減ったし」

「うん、帰ろう」

その後家に帰ったら、ミトさんとオレを探し回ってくれた人に怒られた、もちろんダンも怒られた

それ以上に怒られた後、ミトさんがオレに謝って来た事が悲しかった、別にミトさんは悪い事してないのに

ダンに「お前にはわからんよ、ガキにはね、ププツ」って言われてまた喧嘩になりそうになっただけ

ミトさんに「いい加減にしなさい！ あんた達は全く！」って怒鳴られた

今思い出しただけでもオレのした事が恥ずかしくなってくる
でもダンは口ではあんな事言つといて、オレの事心配してくれて探
しに来てくれたのは嬉しかった
もしこれから先、ダンに何かあつたら真つ先に絶対に探し出してこ
う言つてやるんだ

「ゴンお兄さんが来たから心配するなよ、ダン」

つてさ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2611z/>

ハンター×ハンター（実験作）

2011年12月11日21時56分発行